

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 174号

平成28年10月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

内村鑑三「続一日一生」より (6)

6月1日

五旬節の日がきて、みんなの者が一緒に集まっていると、突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起こってきて、一同がすわっていた家いっぱい響きわたった。また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した。(使徒行伝2・1-4)

人何びとか懐疑なかり。人生の矛盾は万人の感ずるところ、人生そのものが最大疑問物である。しかもひとたび神より力を得んか、さすがの大スフィンクスも跡なく解決せらるるのである。そもそも聖書を学びキリスト教に接せし人においては、人生問題がかえって複雑峻峭となりやすい。しかしその時神のみ霊くならば、難問ことごとく融け去りてただ感謝のみ残るのである。されば人々、聖霊の降臨を祈り求むべし。されど深くかつ多くこれにあずからんとせば当然の順序を踏むを要す。かくて知識より知識に、信仰より信仰に

とわれらは進んでやまざるをもって目的とすべきである。

ペンテコステの出来事は歴史である。ゆえにそのままこれを今日再現せしむることはできない。しかしたれ人も今、形を異にして性質をひとしくする恵みに浴することができるのである。

6月2日

わたしはまことのぶどうの木、わたしの父は農夫である。わたしとつながっている枝で実を結ばないものは、父がすべてこれをとりのぞき、実を結ぶものは、もっと豊かに実らせるために、手入れしてこれをきれいになさるのである。あなたがたは、わたしが語った言葉によって既にきよくされている。わたしにつながっていないさい。そうすれば、わたしはあなたがたとつながっていよう。枝がぶどうの木につながっていないければ自分だけでは実を結ぶことができないように、あなたがたもわたしにつながっていないければ実を結ぶ事ができない。わたしはぶどうの木、あなたがたはその枝である。もし人がわたしにつながっており、またわたしがその人とつながっておれば、その人は実を豊かに結ぶようになる。わたしから離れては、あなたがたは何一つできないからである。(ヨハネ伝 15・1-5)

祈祷の人とは、祈祷をする人ではない。祈祷をもって事をなす人である。さらに進んで、祈祷をもってするにあらざれば、何事もなすあたわざる人である。祈祷をもって学ぶ人である。祈祷をもって働く人である。祈祷をもって戦う人である。すなわち自己の力をもってせずして、神の力をもって万事をなす人である。

6月7日

しかし、わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水が、わき上がるであろう。(ヨハネ伝4・14)

神の言は日光のごとき、また雨露のごときのものである。これは常に照り、絶えず降るものである。これは時を限りて大々的に人に臨むものでない。間断(たえま)なく世を温め、またうるおすものである。そうして伝道はこの方法によって神の言葉を世に供するものでなくてはならない。すなわち静かに、なるべくは言わず語らずして、時を得るも時を得ざるも、間断なく声明の水を世に注ぎ、生命のパンを人間に与うるものでなくてはならない。そうして、かかる伝道に失望はない。成功は必ずこれに伴う。これは信仰と忍耐とを要する事業である。目前の成功を期して、従事すべき事業でない。

6月9日

すべ重荷を負うて苦勞しているものは、わたしのもとに来なさい。あなたがたを休ませてあげよう。私は柔和で心のへりくだった者であるから、わたしのくびきを負うて、わたしに学びなさい。そうすれば、あなたがたの魂に休みが与えられるであろう。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからである。(マタイ伝 11・28-30)

神を信ずるまでは行路難を歎ずるなかれ。神を信じて人生の航路はいたって易きものとなるなり。われをわが神にゆだねて、われのなすべき事はわれによりてなり、われを去るべきの友は遂わずして去り、われに来るべきの友は尋ねずして来たり、われの失うべきものは失せ、われの得べきものは求めずしてわれに来たるに至らん。キリスト信徒の生涯は一種の自動的機械なり。彼はただ神を信ずれば足る。さらば神は彼のためにすべての事をなしたまわん。頌(ほ)むべきかな。

6月13日

良い地に落ちたのは、御言を聞いたのち、これを正しい良い心でしっかりと守り、耐え忍んで実を結ぶに至る人たちのことである。(ルカ伝8・15)

日本国のごとき不信国においては、キリスト教の信仰を維持することだけが、伝道的に見て大事業である。別に教会を起こすに及ばない。多数の信者を作るに及ばない。宗教的大著述をなすに及ばない。一たび受けし信仰を勇敢に頑強に守り通す事だけが大きな伝道事業である。日本国において純福音を信じ通す事は至難の業である。その事は、一たび信仰に入りし者にして、千人はわれらの左に倒れ、万人はわれらの右に倒れしによってわかる。ことに教会または外国宣教師等、外来の援助にたよることなくしてキリスト教の信仰を守り通すことは至難の業である。そうしてこのことを成し得て、われらは大事業をなし得し事について神に感謝すべきである。あるいは30年、あるいは40年、あるいは50年、この社会の冷淡、嘲笑、反対の中にわが信仰を維持することを得て、われは善き伝道を成すべく許されたのである。あえて他に伝道事業を企つるの必要はない。内に対しては明白に、外に対しては独立に、一生信仰を守り通して、われらはそれだけにて善き伝道師たり得たのである。

6月16日

あなたの大庭にいる日は、よそにいる千日にもまさるのです。わたしは悪の天幕にいるよりは、むしろ、わが神の家の門守となることを願います。主なる神は日です、盾です。主はめぐみと誉とを与え、直く歩む者に良い物を拒まれることはありません。(詩篇 84・10-11)

神の恩寵を、この世の幸福または成功においてみるほど、間違うたる見方はない。そう見るがゆえに、われらはたびたび神を疑い、彼を見失わんとするのである。神が人に賜う最大の賜物は、幸福ではなくして聖霊である。聖霊によっておこる善心である。神と人とを愛し得る心である。いかなる境遇に在るも満足する心である。人のすべて思うところに過ぐる平安である。そしてこれらは、神が聖霊をもって直ちに人に賜う恩恵の賜物であって、身の幸福または事業の成功を離れて、しかり、多くの場合においてはこれに反して、賜う賜物である。幸福は、有りてもよく、無くてもよきものである。なくてならぬものは善心である。これさえあれば、他は何が無くともよいのである。人生の目的は、善心獲得にありと言うて可なりである。

6月22日

イエスはもう一度大声で叫んで、ついに息をひきとられた。すると見よ、神殿の幕が上から下まで真二つにさけた。また地震があり、岩が避け、また墓が開け、眠っている多くの聖徒たちの死体が生き返った。そしてイエスの復活ののち、墓から出てきて、聖なる都にはいり、多くの人に現れた。百卒長、及び彼と一緒にイエスの番をしていた人々は、地震や、いろいろの出来ごとを見て非常に恐れ、「まことに、この人は神の子であった」と言った。(マタイ伝 27・50-54)

人の死は何人のそれも厳粛である。これに超自然的なる、神秘的なところがある。人は死に臨んで、ただの動物ではない。また知的機械ではない。いかに冷静なる人といえども、死に面しては霊的である。感情的たらざるを得ない。人は死に臨んで無限の世界に直面する。自己は死して死せざる者なるを直感する。人の死ほど、厳粛なる、おそれ多きものはない。われら、愛する者の死の床にはべりて、霊の世界にありて神の前に立てるがごとくに感ずる。「人のまさに死なんとする、そのいうや善し」にとどまらない。そのさまや聖しである。人の息の絶ゆるところに、神はその天使を率いて臨在したもう。浮薄きわまる人の世も、死が見舞う所だけは厳粛である。神聖である。

6月25日

まことに彼はわれわれの病を負い、われわれの悲しみをになった。しかるに、われわれは思った、彼は打たれ、神にたたかれ、苦しめられたのだと。しかし彼はわれわれのとがのために傷つけられ、我々の不義のために砕かれたのだ。彼は自ら懲らしめをうけて、我々に平安を与え、その打たれた傷によって、われわれはいやされたのだ。(イザヤ書 53・4-5)

最も偉大なることは、人に勝つ事にあらず、人に負ける事なり。

彼にわが場所を譲ることなり。その下に立つことなり。喜んでその

侮辱を受くることなり。つばきせられて十字架につけらるる事なり。

かくなし、かくなされて、われは初めて神の心を知るを得るなり。

まことに高きものは低くせられ、低き者は高くせらる。われら、神

に高くせられんと欲すれば、人に低くせられざるべからざるなり。

6月26日

試練を耐え忍ぶ人は幸いである。それを忍びとおしたら、神を愛する人たちに約束されたいのちの冠を受けるであろう。誰でも誘惑に会う場合、「この誘惑は、神から来たものだ」と言うてはならない。神は悪の誘惑に陥るような方ではなく、また自ら進んで人を誘惑にすることもなさない。人が誘惑に陥るのは、それぞれ、欲に引かれ、さそわれるからである。欲がはらんで罪を生み、罪が熟して死を生み出す。愛する兄弟たちよ。思い違いしてはいけない。(ヤコブ書1・12-16)

試練は人生のつきものである。試練のない人生とてはない。主イエスにあった。われら各自にある。試練は意志の選択の試みである。より高きものとより低き者、肉と霊、来世と現世、キリストとサタン、いずれも明白なる対象物であって、人という人、信者という信者は、いつか一度は、しかり、幾度も、二者いずれかを選ぶかと試みらるるのである。そして上なるものを選びし時に上がり、下なるものを選びし時に下る。人生の成功と失敗はこの選択いかんによりて定まる。かくのごとくに見て、人生は試練の連続である。人生これ試験である。及第か落第か。試験地獄はこれを人生そのものにおいてみるのである。

6月29日

わたしたちは、善を行うことに、うみ疲れてはならない。たゆまないでいると、時が来れば刈り取るようになる。だから、機会のあるごとに、だれに対しても、とくに信仰の仲間に対して、善を行おうではないか。(ガラテヤ書 6.9-10)

働けよ。働けよ。報酬を得るあたわずといえども働けよ。もし報酬を得るあたわずば、働いて報酬を得るの権利を得よ。さらば報酬はついに与えらるべし。また、はばかりせずして報酬を要求し得るに至るべし。報酬の約束せらるるまでに待って、事は成らざるべし。報酬は得られざるべし。報酬は労働に伴うものなり。その、いつ、何びとによりて与えらるるかは、われらの干与するところにあらざるなり。

6月30日

正しい者の道は、夜明けの光のようだ、いよいよ輝きを増して
真昼となる。(箴言4・18)

始めは小なるも可なり。終わりの大ならんことを欲す。始めは悲
しむも可なり。終わりに喜ばんことを欲す。始めに羞恥あるも可な
り。終わりに名誉あらんことを欲す。始めに家なきも可なり。終わ
りに住みかなきをいとう。しかして神はおのれを愛する者を、始め
に苦しめたもうといえども、終わりには「笑いをもて彼の口を満た
し、喜びを彼のくちびるに置きたもう」(詩篇126・2)べし。羞恥に始
まって栄光に終わり、十字架に始まって復活昇天に終わる。「義者の
道は旭日の如し。いよいよ輝きを増して昼の正午(まなか)に至る」。
願わくはわれもその恩恵にあずからんことを。